
名探偵大集合？！

snow+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵大集合?!

【Nコード】

N8081A

【作者名】

snow+

【あらすじ】

コナンのもとに、アイツからの挑戦状が……!!西の名探偵・外国帰りの名探偵・迷探偵小 郎(?!)なども参加し、東の名探偵までも……?!

小包

「あつちゅっ」

その日は太陽の照りつける日だった。毛利探偵事務所に、一人の子供……いや失礼。名探偵の声が響きわたる。

「なんなんだよこの暑さはよっ！ゲ？！32度もありやがる……」

あまりの暑さにバテているようす。……ある小包が届くまでは……。

ピンポン！

探偵事務所のチャイムが鳴る。

「へいへい……」

ガチャ……そこには、一人の男性が立っていた。

「お届け物です！」郵便局の人みたいだ。その男性が持っている小包を見て、コナンが話しかける。

「あの……今大人がいなくて判子とかは……」

男性は全然困った顔をせず。

「いいや！ボウヤにお届け物だから、サインはいいんだよ！君、江戸川コナン君でしょ？」

ちよつと驚く。

「あ……そうだよ！ボク宛なの？」

男性から小包を受け取る。

「ありがとうね！」

小包を小五郎とコナンの部屋へ持ち込み、封を開けようとする。

「宛先がねえーな。……ん？」

カサカサ……小包を縦にふつてみせた。

「……軽すぎじゃねえーのか。何が入ってたんだよ？……ははーん……。そういうことか」

小包を開けた瞬間、コナンの顔が変わった。いつもの憎たらしい口元…そして獲物を見つけた顔に…。

小包（後書き）

下手下手です……。

初投稿なのです。

続きはいつになるか分かりませんが……。

かなりあくと思います。が、読んでもらえたら嬉しいです。

キッドからの挑戦状

「やつぱりな…。」

中から紙を取り出す。紙にはこう書いてあった。

『馬が南瓜に変わるとき

鈴木財閥の宝石

《ブラックリング》

を頂きに参上する。

怪盗キッド』

…そう。この小包は、怪盗キッドからの挑戦状だった。

「ったく。やつぱりキザだねえ…。」

同封してあったバラを見ながら少し呆れる。

「でも、アイツにしては簡単すぎる暗号だな…。しかも実行日が書いてねえーし……。」

「ただいまーっ！コナン君、いるー??」

一階から、蘭の言葉が響きわたる。

「あつやつと帰ってきやがったな。」

とブツブツ言いながら蘭のもとへ行く。彼女の前では、子供の口調に早変わり。

「蘭姉ちゃんおかえりなさい！随分遅かったね？」

「そうなのよー！園子と買い物行ったらさー、つつい買いすぎちゃうのよね」

彼女は、沢山の袋をコナンに見せる。

「（ったく。なんでこんなに買うモンがあんだよ！）」

い、いっぱい買ったんだねー！重かったでしょ！（ハハハ…）」

内心とは違う言葉がどんどん出てくるが、顔は少し呆れ顔。

「あ、コナン君そんなに落ちこまないでね」

「（はいー？）」

蘭は、袋から服を取り出した。

「これっ！」

コナンの前でその服を広げて見せる。赤のボーダーの服だ。

「コナン君に絶対似合うと思って買って来たのっ！」

「ありがとう！」

コナンは服を受け取り満足げた。

「何色もあつたから迷ったんだけど……」

うつ向き、急に暗くなる。

「ど、どうしたの…？」

「えっ？うつん！…何色もあつたから…新一…赤好きだから、コナン君にも赤が似合うかなって思ってた……」

「（蘭……）」

瞳には涙がたまっていた。

「蘭姉ちゃん！ボクこの服一生大事にするから！！だから……泣かないで…？」

「泣いてなんかいいわよっ！あいつのために流す涙なんかいいわ！！」

まるでさつきとは別人のように、彼女は台所へ向かう。

「さ！お腹すいたでしょう？ごめんねお昼過ぎちゃって！ご飯作るからね」

エプロンをつけ、パタパタと忙しそうに、昼食の準備を始める。

「（蘭……ごめんな……）」

ボクも手伝うよ！」

キッドからの挑戦状（後書き）

下手です……（泣）

暗号も簡単すぎます…

ていうか、蘭が中心になってしまいました（汗）

話を広げようとしたら――

少しマイナーで…

でも次は関西弁男が登場予定なので、賑やかになると思います（笑）

平次との電話

「ただいま〜でありますう〜！」

ドアから酔っぱらった小五郎の声が聞こえる。

「おっお父さん?!」

「（酔っぱらいオヤジ…）」

ネクタイを頭に巻き、酔っぱらいフラフラとした中年のこの人を…名探偵毛利小五郎と思いたくないのだが…

「蘭ちゅわ〜ん！毛利小五郎ただいま帰りました〜」

「もうお父さんったら！！昼間からお酒飲んで来たの?!」鼻をつまみながら聞く。

「事件を解決して〜 依頼人のお礼だあ〜ヒック！依頼人のお誘い断ることなんか〜ヒック！出来ねえだろうが〜」

「もう…。夕食出来たら呼ぶから寝ててよね…」

小五郎の背中を押し、寝室へ連れて行く。

「大丈夫かな…おじさん…」

寝室へ入ると、足元に気付かないままキッドの挑戦状を踏みベツトへ入る小五郎。

「あつそれ…」

「ん〜？なんだあ〜？こんな挑戦状邪魔だ〜」

小五郎は挑戦状を手に持ち、ビリビリ破っていく。

「あ〜〜!!!?」

床に落ちた破れた挑戦状をかき集める。

「ちよっとお父さん！！コナン君の大事なものの破っちゃダメじゃない！コナン君、向こう行きましよ」

蘭も紙を拾いながら手招きする。

「はあ〜い。」

（つたく…おっちゃん…ハア）」

ジリリリリリ！

事務所の電話がなると、事務所へ入って来た蘭が受話器を取った。

「はいもしもし。あ？服部君？どうしたの？コナン君？いるわよちよつと待っててね」

受話器を受け取る。

「もしもし？？」

『おう工藤！いてて良かったわー！あの姉ちゃんが出たさかい、びびったわー！』

受話器から関西弁の大きな声が聞こえてくる。

「…なんなんだよ、用件は？」

『夏バテしてんとちゃんとかやつとるか？？喝入れたる思て電話してやつたんや…』

「切るぞ」

受話器を電話に戻しかける。

『あゝちゃうちやう！用件そなんんちやうがな！』

「ったく。初めから言えよ。で？何なんだよ？」

『なんかなあ…。怪盗キッドから挑戦状が来たんや』

「何？！」

思わず絶句してしまう。

「どんな内容なんだ？！」

『なんや、泥棒する日しか書いてあらへんのや。工藤とこにもいったんかいな？』

「ああ来たぜ…。こっちは時間と今回のターゲットが書いてあったぜ」

『せやったら、二枚で一つの挑戦状っちゅーことか？』

「そうみたいだな」

口元がゆるむ。

「おい、その日を教えてくれ。日がないと先回りが…」

『ええでえ？今からそっち行くわな！』

「おう！待つてる！……つて？！は？！オメエ、またアポなしで…」

『今電話したからええやんか』

「あのなあ……」

『今渋谷におるさかい、夜には着くと思うし！おっちゃんや姉ちゃんにはあんばいゆーといてな』

「東京来てんのかよ…。まあ今回はキッドのことがあるからいつか。

」

『さんきゅーな！…ほなな！』

「へいへい」

そういうことで。西の名探偵・服部平次が泊まることになった。

「ねえねえ蘭姉ちゃん！今晚色黒がね…」

平次との電話（後書き）

なんか電話の部分の会話が変になりました…。

あ！でも関西弁はうまく出来たと思います

私、大阪人なので！

…当たり前か（笑）

関西弁は楽です！

西の名探偵

”ピンポーン”

午後八時過ぎ、探偵事務所のインターホンが鳴った。

「邪魔すんで〜！」

事務所のドアを開くと同時に、平次の声が聞こえた。

「邪魔するなら帰れ。」

「はいよ〜…って、なんでやねん?!」

平次の声を聞くや否や、小五郎が突っ込み、平次もノリ突っ込みをした。

「あんだよ。大阪の色黒ボウズめ。アポなしで来やがって……」

ソファーに座っている小五郎は、煙草をふかしながら平次に言った。

「あら、和葉ちゃん！服部君！いらっしやい。もう、お父さん！和葉ちゃん達が来たんなら呼んでよね。」

「蘭ちゃん！遅なつてしても堪忍な！平次がな……」

和葉が蘭に事情を説明しようとする、平次が喧嘩腰に会話に入ってきた。

「なにゆうてんねん、自分?!和葉が渋谷であれやこれや見てるから悪いんやろ?!」

と言うと、平次は和葉に持たされていた和葉が買った大きなショツプ袋をドン！と和葉の足元に置いてみせた。

「やつて！大阪でないモンいっぱいあつたんやもん！！アンタこそなんやの?!推理小説ばつか買うて!!!」

と言うと、和葉は平次に持たされていた平次が買った大量の本を乱暴に平次に差し出した。

「大阪は入荷が遅いんや！東京来た時に買わな意味あらへんやんけ!!!そんなことも分からのか、ドアホ!!!」

「なんやて?!!!そんなん、アタシも東京来た時しか買われへんもん!!!アンタ事件でよう東京来とるからええやんか!」

二人の喧嘩は、事務所内に響きわたった。小五郎はバカらしいと寝室に帰ってしまった。

その時、洗面所のドアが開き、コナンがやって来た。

”ガチャ”

「…一体何なの？」

「あ、コナン君！お風呂上がった？」

「うん。」

コナンはパジャマ姿でバスタオルを肩にかけ、二人の喧嘩を呆れ顔で見ている。

平次はそんなコナンに駆け寄り頭を撫で、和葉に向かいまた喧嘩腰で言った。

「ボウズ待ったでー！おい、和葉！俺はここでコイツと男同士の話があるさかい、お前は姉ちゃん部屋行っとけ！」

「ゆわれんでも行きますー！」

和葉は平次に向かい舌を出し、蘭の背中を押しながら部屋へと向かった。

蘭と和葉が部屋へ行くのを見ると、コナンと平次も事務所のソファに座った。

「…ったく。来るの遅いじゃねえーか。蘭がオメーらの分も料理作ってくれたんだぜ？」

「堪忍、堪忍！明日よばれるさかい！そんなんより、今はコレやろ。」

「…」
と言うと平次は、バッグから怪盗キッドからの予告状を取り出した。

西の名探偵（後書き）

更新がかなり遅れました（汗）

このストーリーも、登場人物をたくさん出そうと思ってたりします。
まだ分かりませんが…。

予告状の解説

平次が持つて来た予告状には、こう書いてある。

『葉月、下記の絵の日に

《ブラックリング》

を頂きに参上する。

怪盗キッド』

キッドの名前の下には、一枚の絵が載っている。

犬が炎をまといっている絵だ。

予告状とにらめっこしているコナンと平次は、やっと口を開いた。

「…葉月つーと、八月つーことだろ？」

「そんで、この絵が日にちの暗号やる？なんなんや…この絵エ。」

コナンはあごに手をつき、深く考え込んでいる。

「犬、炎…炎、犬…犬、火…火、犬………！」

「火……！」

コナンの独り言に、平次も反応した。二人にいつもの電撃が走ったようだ。

「工藤……！」

「ああ……。」

二人は向き合うと、いつものにくたらしい口元がゆがんだ顔になった。

「火、犬、といえば、アレだよな……。」

コナンはソファから立ち上がると、椅子に立ち事務所の本棚を探った。そして探り当てた一冊の本を取り出し、確認した。

「…やっぱり、この日だ。」

コナンの確信した顔を見ると、平次もコナンの元へ駆け寄りその本

を覗き込んだ。

「…この日やつちゅーことか。」

二人はまたソファアへ戻った。

「これで日にちと時間と今回のターゲットも分かったな……」

コナンは小五郎に破られたぐちゃぐちゃでテープで貼ってある予告状を出した。

「な…！なんやねん、ソレ?!」

平次はその予告状を指差し、びっくりしたようだ。

「ああ。昼間おっちゃんに破られたんだよ…。酔っ払ってたからな

…」

コナンがため息をつくとき、平次は新しい紙を取り出した。

「それやったらよう分からんし、コレに写してくれや?」

「…分かった。」

コナンが新しい紙に予告状の内容を写し始めると、平次がコナンに話し掛けた。

「…なあ、思ったんやけど、ブラッキングで最近作られた宝石やる? キッドでいつも歴史ある宝石ばかり狙ってんのとちゃうんか?

…なんでや?」

コナンは写すのに夢中で、適当に返事をした。

「さあな。そりゃなんか理由があんだらうよ?」

「あんなあ…。……っ?!」

平次は本気にしてないコナンに返事しようとしたが、誰かに見られているような気がして、事務所の窓を見た。

夜は暑いので、事務所の窓は夜でも寝るまでは開けっぱなしにしている。

「なんだ?」

「…いや、なんでもあらへんで!」

平次はそう言うと、立ち上がり風呂に向かった。

「あんだよ…。」

書き写し終わったコナンも部屋に戻ろうと、事務所の窓を閉めた。

その時、コナンも誰かの視線を感じた。

「……。」

コナンは無言で向かいのビルの屋上を睥んだ。

「（…なんなんだ、この感じ…。服部も、さっきこうだったのか…
…。ま、考えすぎだよな。）」

コナンは窓を閉め終わると、予告状を手に持ち事務所の電気を消し部屋へ戻った。

「はーん…さすが、名探偵。もう解いちまったかー。」

コナンの感じ取った視線の通り、事務所の向かいのビルの屋上には、望遠鏡を持った黒羽快斗の姿が。

「あつ、ヤベ！見付かれる…。」

その時快斗は平次にこちらを向かれ、焦っていた。

なにやら快斗の耳にはイヤホンが。

「やっぱ盗聴機仕掛けておいて、正解だったな。」

そう。昼間郵便局の配達を装おり事務所を訪ねた時に、ドアの鍵穴に盗聴機を仕掛けていたのだ。

「探偵君もこつちを見てるな…。気付かれる前にずらかるか。」

と言うと、快斗は事務所と反対側の屋上から飛びおりた。

「いやっほー！」

快斗は途中でキッドに変装し、落ちる寸前にハンググライダーで飛び立って行った。

「対決の日を楽しみにしてるぜ、探偵君！ー」

キッドは夜の暗闇の中に吸い込まれるよう、消えていった。

予告状の解読（後書き）

暗号簡単かも。

てか、ある本？に書いてあります！

どうやって解けたかは、まだ秘密です。

コナンと平次はいつもああなんで（笑）

快斗で出したけど…。

キッドってバレバレ！（笑）

今回キッド出すの早くしました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8081a/>

名探偵大集合？！

2010年11月15日08時30分発行